

理事長のごあいさつ

新たな年度を迎えて—2 年目のご挨拶—



和歌山地域経済研究機構
理事長 遠藤 史
【和歌山大学経済学部長】

昨年の 4 月に和歌山大学経済学部長に任命され、さらに本機構の理事長も拝命することになりましたから、早くも 1 年が経ちました。この間、本機構の皆様方、さらに和歌山の地域経済を様々な立場において担っておられる皆様方と、様々な会議や会合を通じて、実り豊かな対話を重ねる機会を持つことができましたことを嬉しく思います。

和歌山地域経済研究機構は、和歌山商工会議所、和歌山社会経済研究所そして和歌山大学経済学部の三者によって平成 8 年 7 月に創設されて以来、和歌山の地域経済を活性化するための、地域に根ざしたシンクタンクの機能を担う機関として順調な発展をとげてきました。私自身は地域経済研究の専門家ではありませんが、本機構の理事長を拝命するという貴重な機会を通じて、和歌山という地域に暮らし、地域の発展を希求する立場から、専門家集団たる本機構とその願いを共有しつつこの 1 年を皆様方と共に歩むことができたことを得難い経験と考えています。昨年度に引き続き今年度も、微力ながら皆様の研究活動を最大限の力をもって支えていく所存です。

振り返ってみますと昨年（2011 年）は、3 月に東日本大震災という未曾有の大災害に襲われたのみならず、ここ紀伊半島でも 9 月初旬、南部を中心に台風による風水害・土砂災害が襲う重大な事態に見舞われ、自然の猛威を改めて思い知らされた 1 年でした。またこのような災害に伴って地域コミュニティに脅威を与えかねない様々な問題が発生するに至ったことは周知の事実です。しかしながらその半面、このような重大な局面を経験した人々の心の中で、地域復興支援の動きなどを通じ、今までは忘却していたかに思われた地域、そして地域コミュニティの重要性が、真に実感されるに至ったこともまた事実だと思います。様々な報道機関の行ったインタビューなどから見ても、地域の重要性が人々の心の中で、昨年ほど強く再認識された年はないように思われます。

この機会をとらえるならば、我々が和歌山地域経済研究機構もまた、専門家集団たるその能力を生かして、人々が心の中で今、強く希求している地域という存在を支えていくべく、専門的な視点に立った体系的な調査・研究を積み上げつつ、地域の発展にますます貢献していくことを求められることになるでしょう。今年度より新たに立ち上がった研究プロジェクト等を通じて、現在までに蓄積された調査・研究の諸成果も生かしながら、地域に対する更なる活性化の提案を行っていく責務が我々にはあるのだと考えます。

昨年の就任のご挨拶で私は、和歌山という地域が閉じた地域ではなく、他の地域との様々な相互関係を有することを述べさせていただきました。そしてグローバル化が進む

今日の世界を視野に入れるなら、グローバルな潮流とローカルな状況との響き合いに注目することもまた必要であろうと指摘いたしました。体系的な調査・研究はともすれば自分たちの扱う狭い範囲に考察を限定しがちな傾きがありますが、おそらくここに加えるべきは、いささかの想像力をもって、その範囲を敢えて超えようとする意欲ではないかと思います。昨年度のご挨拶でも提案いたしましたが、この意味では、国内外における「うまくいっている」地域経済や、「賑わっている」中心市街地との対照研究も、本機構の研究に新たな視点を提供してくれる可能性があります。

そのささやかな例をあげるならば、今年の秋、ほんの偶然の機会でしたが、経済学部足立教授が関わっておられるイギリスの小さな街の活性化の試みを拝見することができました。そこは決して特別な観光資源に恵まれているような場所ではなく、ごく普通のイギリスの街と思われましたが、その小さな街の中心市街地活性化に積極的に取り組んでおられる地元の人々にお会いし、親しく話をさせていただいた中で実感したのは、「この人々の思いが、そしてこの人々のエネルギーと想像力が、現実には街を活気ある場所に変えてきたのだ」ということでした。ある人は商店街から、別の人は博物館から、また別の人はコミュニティ FM 放送から、様々な専門知識を駆使して街を活気づけ、人々を様々な活性化策に参加させてきたのです。そこに私は、国や地域は違っても、同様の問題を考え、同様の問題を解決しようとする人々との、ある種の共通点、敢えていうならば共感のようなものを感じました。

豊かな自然、豊かな文化と伝統、そして歴史に裏付けられた幅広い地域経済を持ったこの和歌山という地域に対し、和歌山地域経済研究機構が今後、その諸活動を通じて、そして想像力をもって、一層の貢献をなすことを願ってやみません。